

# 元服曾我

宮增作

季は	地は	ワキ
秋	相模	箱根の別当
		シテ 曾我十郎
		トモ 徒者団三郎
子方	狂言 能力	
	箱王丸	

「打つを限りの秋衣。く。恨みをいつか晴らさん。

「かやうに候ふ者は。曾我の十郎祐成にて候。さても某が親の敵の事。世に隠れなく候へども。敵は猛勢我等は一人の事にて候ふ程に。思ふにかひなく打ち過ぎ候。又弟にて候ふ箱王は。幼少より箱根の御寺に上せ置きて候。あまりに便りなく候ふ程に。彼者を男になし。諸共に本望を達せばやと思ひ。唯今箱根の御寺にと急ぎ候。

サシ  
「一樹の陰に宿る事も。是れ生々の契りなり。

二人 「同じ井の流れを汲むも。皆前世のかたらひの宿縁なり。深き乳房の海山の。たとへを積る恩徳の。情を思ふ涙の袖。乾す便りをと待つまでの。命を頼むばかりなり。身は露霜の果までも。兄弟ならでは又もなし。急ぎ箱根の寺に上り。箱王殿を男になし。

下歌  
「父の恨みの涙の。袖をも共に乾すやとて。曾我の

里をぞ立ち出づる。

上歌

「月影は。雪にて明くる箱根山。／＼。嶺も二つの  
影添ひて。ほの／＼と。うつろふ富士を湖の。波  
の雪も時知らで。春夏秋をば送れども。いつか思  
ひの末通る。心ばかりの頼みにや。つれなき命惜  
しむらん。／＼。

シテ詞

「急ぎ候ふ程に。是は早箱根の御寺に着きて候。急  
ぎ別当の御坊へ参りて。某が罷り登りたる由を申  
し候へ。

団三郎

「畏つて候。如何に此御坊へ案内申し候。  
能力 「誰にて渡り候ふぞ。

団三郎

「唯今祐成の御登山にて候。其由御申し候へ。  
能力 「心得申し候。暫く御待ち候へ。やがて申し入れう  
ずるにて候。如何に申し上げ候。  
能力 「何事ぞ。

ワキ詞

「唯今祐成の御登山にて御座候。

能力

ワキ 「何と祐成の御登山にてあると申すか。

能力 「さん候。

ワキ 「やがて御目に懸らうするにて有るぞ。此方へと申し候へ。

能力 「畏つて候。如何に申し候。こなたへ御出であれと

申され候。

シテ 「心得申し候。

ワキ 「や。こなたへ御出で候へ。さて唯今の御登山は何

事にて御入り候ふぞ。

シテ 「さん候唯今参る事余の儀にあらず。弟にて候箱王を申し請け。元服せさせん為めに参りて候。

ワキ 「何と箱王殿を元服せさせん為めに御出でと候ふや。

シテ 「さん候。

ワキ 「是は思もよらぬ事を承り候ふものかな。箱王殿の御事は。大方殿より仰せ合はさるゝ子細候へば。

祐成は御存じ有るまじく候。思ひもよらぬ事にて候。

シテ「さん候仰せ尤にて候へども。それは母にて候ふ者の女計らひにて申され候ふべし。唯ひらに祐成に賜はり候へ。

ワキ「いや大方殿御一人にても御座なく候。故河津殿仰せられつる子細も候ふ間。総じて祐成は御いろひ有るまじく候。

シテ「仰せ少しも違はず候。親にて候ふ者の申事はさることにて候へども去りながら。御心を静めて聞し召され候へ。我等が親の敵の事。あつぱれ討たばやとは存じ候へども。

カル「敵は猛勢力なし。唯別当の御慈悲にて。箱王殿を男になし。父の恨みの敵をも。共に討たせて給ふならば。出家の功德に劣るまじと。

下歌地「かきくどきつゝ申せば。是非の言葉もあらばこそ。

理なりや痛はしやと。別当も列座の人も。殊に袖をしほりけり。

上歌

「夢の世にながらへて。く。有るもかひなき身の行方。命ぞ限りなる。惜しまずながら存らへて。思ひをいつかは未遂げて。胸の煙も其名をも。富士の嶺に上げて。兄弟が。其亡き跡と弔はれん。」

ワキ詞

「祐成にくどき立てられ落涙仕りて候。此上は力及

ばぬ事。別当は早領掌申し候ふさりながら。箱王殿の御心中何とか思し召され候はんずらん。此方へ呼び出だし尋ね申さうするにて候。

シテ「かゝる祝着なる事こそ候はね。さらば急いで箱王を此方へ召され候へ。

ワキ「心得申し候。如何に能力。箱王殿に此方へ御出であれと申し候へ。

能力  
「畏つて候。」

「いかに箱王殿。唯今祐成の御登山は余の儀にあらず。箱王殿を男になし申し。本望を達したき由仰せられ候ふ間。愚僧は早領掌申して候ふが。さて御心にはいかゞ思し召され候ふぞ。

箱王「ともかくも師匠の御はからひにてこそ候ふべけれさりながら。我等が親の敵の事。世に隠れなき事ぞかし。

カル「同じ兄弟にて候へば。十郎殿の御身の上。独りに

限らぬ敵ぞかし。たとひ寺にありとても。忘るゝ隙はよもあらじ。ともぐはからひ給ひ候へ。

ワキ「さては箱王殿も同じ御心にて候。如何に祐成。御心を静めて聞し召され候へ。箱王殿生れさせ給ひしこき。故河津殿別当を召され。この子よくは弟子とも定め。悪しくはともかくも別当が計らひたるべしと仰せられし程に。権現の社官別当なれば。箱根をかたどり御名をも。箱王殿と附け申し。

カール

「今元服の折までも。師弟の契約浅からず。

クドキ

「同じくは出家をも遂げさせ申し。一寺を継がせ申したくは候へども。御身の心もさすがなり。祐成の御事も痛はしゝ。よし俗体になり給ふとも。内には慈悲の心中をなし。外には仁義を宗として。祐成の影身になり給へと。別当自ら酌を取り。

地  
「行く末を。祈る師弟や兄弟の。く。情は共に浅からず。深き箱根の海山の。たとへは同じ心にて。

年々月日を迎へても。猶成人を急ぎつる。其かひ有りて今は早。ともに蔭高き。花の若枝ぞめでたき。かくて此日も暮方の。月の盃急ぎつゝ。  
時剋も今は移るなり。暇申して帰らん。

ワキ  
「花を吹く。嵐につるゝ梅が香を。留めてもいかに有明の。尽きぬぞ名残なりける。

シテ  
「名残もさぞなあらましの。末頼みある中なれば。

ワキ  
「又登山も有るべしや。

ロンギシテ

シテ「さらばといひて兄弟は。

ワキ「早門前に。

シテ「出で行けば。

地「さすがに別当も。年月馴れしなじみをば。いつか  
忘れん其跡を。見やれば伴なひ兄弟は。曾我の里  
にぞ帰りける。く。

シテ詞「如何に団三郎。

団三郎「御前に候。

シテ「別当の色々仰せられしを涯分申し。箱王を伴なひ  
帰る事の嬉しさは候。

団三郎「御詫の如く。近頃目出度き御事にて御座候。

箱王「如何に申すべき事の候。

シテ「何事にて候ふぞ。

箱王「此まゝ故郷へ帰り母御に対面申すならば。定めて  
元服は叶ふまじきと仰せ候ふべし。唯此路次にて  
髪をはやして賜はり候へ。

シテ

「實にく是は尤にて候ふ去りながら。元服など、申す事は。聊爾にはなき事にて有るぞとよ。如何に団三郎。箱王こゝにて髪をはやせと申すは如何あるべきぞ。

団三郎

「實にく箱王殿の御詫の如く。此まゝにて御帰り候はゞ。定めて大方殿のとかく仰せ候ふべし。ござかしき申事にて候へども。何か苦しう御座候ふべき。目出度う此人宿りにて。そと御ぐしをはやし申され候へかしと存じ候。

シテ  
「さては汝も左様に存じ候ふよな。さらば是なる人宿りにてそと髪をはやさうするにて候。如何に箱王殿かう來り候へ。

サシ  
「實にや我等程果報つたなき者はよもあらじ。幼くして父を討たせ。其本望をば遂げずして。猶有りがひなき身となりぬ。

箱王  
「よしくそれも命を限り。終には恨みを晴るべき

なれば。唯元服こそ嬉しけれと。

二人 「兄弟主従すごくと。

地 「髪をはやして千代までと。言葉ばかりは祝へども。  
そぞろにせきあへぬ。涙や心なるらん。

地クリ 「それ生死の道さまぐにして。輪廻の迷ひ多し。  
因果を離れぬ絆も皆。親子兄弟の宿縁なり。

シテサシ 「實にや人の親の迷ふ事。まことの闇にはあらねど  
も。

地 「子を思ふ道にはたどると云ふ。雲井の鶴は月影の。  
さやけき空と思へども。これも子をのみ思ひの闇  
に。声をかはして鳴くとかや。

シテ 「我等は又親の跡に。

地 「残りて物を思ひの露の。雨とも降り涙とも過ぎ。  
いつかは晴れん心の闇の。

シテ 「名をや埋まん苔の下。

地 「朽つるは憂き世の袂かな。

「龍門原上の土に身はなるとも。屍の跡を思へたゞ。

惜しみても惜しむべきは。後名の嘲り。されば大國に。千里を翔る虎は。一毛を惜しんで。吹き来る風を含みて。其身をかへて死すとかや。日本の弓取は。其名を末代の家に惜しみ。一命を軽んずるも。是れ皆明経に。本文を思ふ心なり。身は一代名は末代。理や世の中は。電光朝露石の火の。あるにも有らぬ草の露。消ゆる境は夢なれや。

シテ  
「今<sup>ノ</sup>の我等<sup>ヲ</sup>が有様<sup>ヲ</sup>。

地  
「思ふも憂き命の。惜しからぬ身なれども。本望を遂ぐるまでと。頼む便や兄弟。主従ともにすごくと。髪をはやして祝言の。言の葉添ふる初元結。行方はめでたかるべしや。親孝行もかくばかり。さこそは草の陰に。我等を守り給ふらん。「如何に能力。祐成に申すべき事の候ひしをはたと失念してある間。追付き申さうするにて有るぞ。

汝は先へ行きて。何方まで御出で候ふぞ留め申し

候へ。

能力  
「畏つて候。

能力  
「如何に申し候。別当の是まで御出でにて候。

团三郎  
「如何に申し候。別当の是まで御出でにて候。

シテ  
「何別当の是まで御出でと申すか。此方へ御入りあれと申し候へ。

团三郎  
「畏つて候。急いで此方へ御座候へ。

シテ  
「さて是までは何の為めに御出で候ふぞ。

ワキ  
「さん候是まで参る事余の儀にあらず。箱王殿の御  
髪を。愚僧はやし申さん為めに参りて候。

シテ  
「其事にて候。箱王申し候ふは。此ま、故郷へ帰り  
候はゞ。母にて候ふ者定めて元服は叶ふまじき由  
申し候はんずる間。此路次にて髪をはやせと申し  
候ふほどに。唯今これにて某がはやして候。

ワキ  
「それこそ目出度う候へ。いでく元服祝はんとて。

別当に伝はる重代の太刀。伊豆權現の力を添へ。

思ふ本望遂げ給へと。箱王殿に奉る。

地「やがて祝ひの御酒一つ。く。すゝめ申せや人々と。

同じく共に円居し。酒宴をこそは始めけれ。

シテ「咲く頃の。梢時めく折に来て。

地「烏帽子桜の花を見ん。

ワキ詞  
シテ「如何に申し候。是はめでたき折なれば一指御舞ひ候へ。

シテ「畏つて候。さらばそと舞はうするにて候。

地「烏帽子桜の花を見ん。(男舞)

シテワカ「菊の名の。曾我の昔を思ひ出でゝ。

地「万代祝ふ心こそあれ。心こそあれく。

シテ「心言葉は人の情。

地「心言葉は人の情。

地「徒に朽ちぬる身は惜しむべし。名は残り有る代の跡の世語り。夢ならば覚めなん。現とも白真弓。

引きは返さじ富士の高嶺に。かならず名を上げて。  
今の世語りと思し召さるべし。是こそ祝ひの酒宴  
の戯ぶれ。師弟の情ぞ有難き。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹著